

福沢諭吉の英語研究

飛田良文

I) 『福翁自伝』の発言から

日本の近代化に大きな力を発揮した福沢諭吉の思想については多くの考察がある。しかしそのための手段とした英語力については論考がない。

また、諭吉の生涯については『福翁自伝』によって、すべて明らかになっていると考えられている。福沢諭吉事典編集委員会編の『福沢諭吉事典』（慶應義塾大学出版、2010年）も編集されている。そして、松沢弘陽校注の『福翁自伝』（『福沢諭吉集』新日本古典文学大系、明治編、第10巻、岩波書店、2011年）は、詳細な注釈考証がなされており、今日の段階で最もすぐれたものと評価できる。しかし、英語研究という視点から見ると、いくつかの点で未解決の事実がある。そこでまず、『福翁自伝』の中から英学関係の記事を抽出し、英語研究の方法を整理し、その背景を明らかにしたい。引用は、松沢弘陽校注『福翁自伝』（岩波書店）による。振り仮名は注目すべきもの以外は省略した。文頭・文中の〔 〕内は飛田の注記である。

『福翁自伝』の発言の中には、諭吉が自分の論考の時期を区分した発言がある。

幕府時代に私の著はした西洋事情なんぞ 出版の時の考には天下にコンなものを読む人が有るか無いか夫れも分らず 仮令ひ読んだからとて之を日本の実際に試みるなんて固より思ひも寄らぬことで 一口に申せば西洋の小説夢物語の戯作くらゐに自から認めて居たものが 世間に流行して実際の役に立つのみか 新政府の勇氣は西洋事情の類でない一段も二段も先きに進んで思切つた事を断行してアベコベに著述者を驚かす程のことも折々見えるから ソコで私も亦以前の大願成就に安んじて居られない コリヤ面白い 此勢に乗じて更に大に西洋文明の空気を吹込み 全国の人心を根底から転覆して 絶遠の東洋に一新文明国を開き 東に日本、西に英国と相對して後れを取らぬやうになれないものでもないと茲に第二の誓願を起して（略）書き散らしたのが西洋事情以後の著訳です（379頁7行～380頁3行）

『西洋事情』の反響の大きさと、それ以後の「新政府の勇氣」に驚かされて、諭吉は「第

二の誓願を起して」「書き散らした」という。そこで、(1)『西洋事情』までと、(2)それ以後の著作とで、大別できる。

本稿では、(1)『西洋事情』までの時期を対象として、蘭学から英学へ、オランダ語から英語への過程を、諭吉が参考にした文献が何であったかを中心に考察してみたい。

Ⅱ) 蘭学から英学へ

諭吉は天保5年12月12日、大阪玉江橋北詰の中津藩蔵屋敷に生まれた。天保7年、父百助没し、母子6人藩地中津（現大分県中津市）に帰る。幼時叔父中村術平の養子となり、中村姓を名のる。14、5歳のころから漢学を学ぶ。21歳のとき蘭学を志して長崎に出る。オランダ語の手ほどきを受け、安政2年22歳のとき、大阪に出て緒方洪庵の門に入る。

安政3年、中村家から福沢家に復し、福沢家を相続する。安政3年、適塾の塾長となる。安政5年、中津藩から出府の藩命を受けて、10月中旬出府、10月下旬江戸築地鉄砲洲の中津藩奥平家中屋敷内の長屋に蘭学塾を開く。その実情は『福翁自伝』に次のように語られている。

[安政五年 蘭学塾の教師として江戸に呼ばれる]

私が大阪から江戸へ来たのは安政五年二十五歳の時である 同年江戸の奥平の邸から御用があるから来いと云て私を呼に来た、それは江戸の邸に岡見彦曹と云ふ蘭学好の人があつて 此人は立派な身分のある上士族で 如何かして江戸藩邸に蘭学の塾を開きたいと云ふので様々に周旋して書生を集めて原書を読む世話をして居た、所で奥平家が私を其教師に使ふので(略)私が大阪に居ると云ふことが分たものだから 他国の者を雇ふことはない藩中にある福沢を呼べと云ふことになつてソレで私を呼びに来たので(略) (110頁4行)

大阪から江戸へ諭吉を呼んだのは、岡見彦曹であった。この人物は中津藩江戸定府の上士族で、開明派上士グループの中心であった。そして、『福翁自伝』には次のように「和蘭辞書の原書を翻刻」していたと語っている。

既に江戸に始めて来たとき同藩の先輩岡見彦曹と云ふ人が^{オランダ語}和蘭辞書の原書を翻刻して一冊の代価五両 その時には安いもので随分望む人もある(略) (317頁13行)

この和蘭辞書が何であるか不明であったが、高野彰「幕末の洋書印刷物—活字による見分け方—」(1987年)によって明らかにされた。¹⁾そこには、

岡見彦三版

中津奥平藩の上士族岡見彦三の復刻、印刷した図書の事。福沢諭吉の『福翁自伝』によると、(略) 岡見版については、「既に江戸に初めて来たとき、同藩の先輩岡見彦曹という人が、オランダ辞書の原書を翻刻して」いたといっている。福沢が「初めて江戸に来た」のは安政5年10月の中旬とも下旬ともいわれているので、岡見版はそれ以前に出されていたことがわかる。岡見版の辞書の本文中には岡見が印刷したという記述はない。早稲田大学で所蔵する岡見版は、その背に「NAGEDRUKT DOOR O. M. FIKOSAOE TE JEDO」という表示がある。(略) 'O. M. FIKOSAOE' の'M'は(略) 'OKAMI' の'M'である。(略) この版は使用活字が蕃書調所版のと同じである。両者の交流、接触があったのか、なかったのかははっきりしない。(略) 岡見彦三版は現在のところ次の1点しかしられていない。

安政5年(1858)(?)

Weiland, P.

Kunstwoordenboek.

俗称, クンストウォールデンブーク

と、記されている。『クンストウォールデンブーク』が翻刻本であった。『福翁自伝』には岡見彦三は彦曹と書かれている。早稲田大学中央図書館蔵本(文庫8/B240)を調査すると、背表紙に貼ったタテ4.1cm×ヨコ3.2cmの白紙に図1のように印刷されている。NAGEDRUKTは復刻の意味である。



図1

次に、諭吉は江戸の蘭学者の実力を試しに出かける。

[江戸の蘭学社会も左まで恐れることはない]

扱私が江戸に参て鉄砲洲の奥平中屋敷に住で居ると云ふ中に 藩中の子弟が三人五人づゝ、学びに来るやうになり 又他から五六人も来るものが出来たので其子弟に教授していたが(略) 私も江戸に来て見た処で全体江戸の蘭学社会は如何云ふものであるか知りたいものだと思て居る中に 或る日島村^{しまむらていほ}鼎甫の家に尋ねて行たことがある (略) 此一事で私も窃に安心して 先づ是れならば江戸の学者も左まで恐れることはないと思ふたことがある (112頁15行~114頁1行)

そうこうしているうちに、徳川幕府は、西洋諸国と開国の交渉に入ることになる。その実体を諭吉は「大不安心な事が生じて来た」と語る。其れは安政6年の五カ国条約の発布であった。

[安政六年五ヶ国条約が発布になる] [横浜へ行って見たが、一寸も言葉が通じない] 蘭学社会の相場は大抵分て先づ安心ではあつたが 扱又此処に大不安心な事が生じて来た 私が江戸に来た其翌年即ち安政六年 五国条約と云ふものが発布になつたので横浜は正しく開けた計りの処、ソコデ私は横浜に見物に行た 其時の横浜と云ふものは外国人がチラホラ来て居る丈けで掘立小屋見たやうな家が諸方にチヨイへ出来て外国人が其処に住で店を出して居る 其処へ行って見た所が一寸とも言葉が通じない 此方の云ふことも分らなければ彼方の云ふことも勿論分らない 店の看板も読めなければビンの貼紙も分らぬ 何を見ても私の知て居る文字と云ふものはない 英語だか仏語だか一向分らない (114 頁 11 行～ 115 頁 3 行)

五ヶ国条約の調印は福沢出府の安政 5 年、アメリカとは 6 月 19 日、オランダとは 7 月 11 日、イギリスとは 7 月 18 日、フランスとは 9 月 3 日で、結んだ修好通商条約が発布されたのは安政 6 年 6 月 2 日、外国人居留地が開かれた。

諭吉が横浜へ見物に行ったのは安政 6 年 6 月 2 日以降である。

ここで英学と密接な関係があるのは、イギリス、フランスとの修好通商条約に関する通信用の公文 (all official communications) についての条項である。時期的にイギリスが最初なので、その第 21 条について紹介する。

「日英和親条約」の交渉にあたって、イギリスの司令長官スターリングは公式通信は英語で行うことを要求した。そこで徳川幕府は、日本人が英語を習得したら、英語で交渉しようとして回答した。『大日本古文書 幕末外国関係文書之十二』に「都而公之掛合ハ、追而日本人 嘆語熟達之上ハ、嘆咄嘲語ニ而可致候事、」と記録されている。²⁾ 安政 5 (1858) 年 7 月 18 日、イギリス使節エルギンと「日英修好通商条約」が調印されると、その第 21 条に

This treaty being written in English, Japanese, and Dutch languages, and all the versions having the same meaning and intention, the Dutch version shall be considered the original; but it is understood that all official communications addressed by the Diplomatic and Consular Agents of Her Majesty the Queen of Great Britain to the Japanese authorities, shall hence forward be written in English. In order, however, to facilitate the transaction of business, they will, for a period of five years from the signature of this Treaty, be accompanied by a Dutch or Japanese version.(ARTICLE XXI.)

と明記された。オランダ文が正式 (original) であるが、それは調印から 5 年間 (for a period of five years) のことで、その後は英文が通信用の公文となる。この外圧によって、徳川幕府は英語の学習に全力をあげる必要に迫られた。

安政6（1859）年3月10日には、旗本や御家人に外国語の稽古を命じる。『大日本古文書幕末外国関係文書之二十二』には「通弁之儀者、尤肝要之儀ニ付、御旗本、御家人之内ニ而人物相撰、亜米利加、魯西亞、英吉利、仏蘭西等之語稽古為致、習熟之者出来候様、厚く世話可被致候事、（中略）尤開港相成候場所々々江も、通詞共出来候様、世話可被致候事、」と通訳の養成を開始している。³⁾ また蕃書調所は、同年堀達之助を蕃書調所対訳辞書編集主任に任命し、『英和对訳袖珍辞書』の編集にとりかかった。

また、このイギリスとの第21条の約束は、以後に調印する各国との修好通商条約にも採用された。この点については長尾正憲著『福沢屋諭吉の研究』には以下のように紹介されている。⁴⁾

幕府が締結した通商条約が、当該国の公使・領事からの公文に使用する国語を規定している（略）ちなみにこの条文は締約11国のうち8カ国に見られる。

国別	使用外国語	訳文添付期間	添付訳文
英国	英語	5年（調印後）	日又は蘭
仏国	仏語	5年	日並に仏
ポルトガル	英語	3年（調印後）	日又は蘭
プロシア	独語	5年（施行後）	日又は蘭
スイス	仏語	5年（施行後）	日又は蘭
ベルギー	仏語	5年（施行後）	日又は蘭
伊国	仏語・伊語	5年（施行後）	日又は蘭
デンマーク	仏語	5年（施行後）	日又は蘭

これによると、英・仏・ポルトガルの三国は、

英国 1864年8月26日（元治元年7月25日）

仏国 1864年10月9日（元治元年9月9日）

ポルトガル 1864年8月3日（元治元年7月2日）

と元治元年7～9月のころに猶予期間が切れ、以後は英語か仏語による公文の往復が義務づけられていた。

洋学者としての福沢諭吉が、こうした現状に無関心だったとは考えられない。そこで「一切万事英語と覚悟を極め」ることとなる。『福翁自伝』では次のように、

〔一切万事英語と覚悟を極める〕

所で今世界に英語の普通に行れて居ると云ふことは予て知て居る、何でもあれは英語に違ひない 今我国は条約を結んで開けかゝつて居る 左すれば此後は英語が必要になる

に違ひない 洋学者として英語を知らなければ逆も何にも通ずることが出来ない 此後は英語を読むより外に仕方がないと 横浜から帰た翌日だ、一度は落胆したが同時に又新に志を發して 夫れから以来は一切万事英語と覚悟を極めて (略) (115 頁 9 行～ 116 頁 3 行)

と語っている。

Ⅲ) 諭吉の英語学習

「一切万事英語」と覚悟してから、諭吉は英語教師をさがす。最初に、長崎通詞の森山多吉郎が幕府の御用で江戸にいるというので、英語教授を頼むが断念する。その過程を次のように語っている。

[森山多吉郎に英語教授を頼む] (断念)

扱其英語を学ぶと云ふことに就て如何して宜か取付端がない、(略) 其時に条約を結ぶと云ふが為めに長崎の通詞の森山多吉郎と云ふ人が江戸に来て幕府の御用を勤めて居る其人が英語を知て居ると云ふ噂を聞出したから ソコで森山の家に行て習ひませうと斯う思ふて 其森山と云ふ人は小石川の水道町に住居して居たから早速其家に行て英語教授の事を頼入る (略) 凡そ其処に二月か三月通ふたけれどもどうにも暇がない (略) 加ふるに森山と云ふ先生も何も英語を大層知て居る人ではない 漸く少し発音を心得て居ると云ふ位 逆も是れは仕方がないと余儀なく断念 (116 頁 3 行～ 117 頁 10 行)

英語教師がいないので、諭吉は「英蘭対訳の字書があれば先生なしで自分一人で解することが出来る」と考えた。横浜に見物に行ったときに、蘭英会話書を二冊買って来たが、字書がなくて読めない。辞書が欲しい。彼は語る。

[横浜の店で蘭英会話書 (二冊) を買う] [英蘭対訳の字書が欲しい]

(略) 私が横浜に行た時に キニツフルの店で薄い蘭英会話書を二冊買て来た ソレを独ひとりで読よむとした所で字書がない 英蘭対訳の字書があれば先生なしで自分一人で解することが出来るからどうか字書を欲いものだ (117 頁 11 行)

キニツフルの店について松沢弘陽は校注で、

クニフラー商会 (L.Kniffler&Co.)。ドイツ人 ルイス・クニフラーとヘルマン・ギルダマイスターが共同で、横浜居留地五十四番地 (現横浜市中区山下町五十四番地) で開業。(略) クニフラーは来日までオランダ領東インド植民地のジャワで営業していたか

ら、「独逸人でこそあれ蘭語蘭文が分」ったのであろう。(115 頁 9 行)

と記している。しかし蘭英会話書についての校注はない。不詳。

そうしているうちに、幕府の洋学校「蕃書調所」の字書を借りればよいと考えつく。そこで、いろいろ手続をとって、「蕃書調所」入門の書類をそろえて、入門許可をもらう。しかし、辞書を家に持ち帰ることができないので、一日で通うのを止める。この経過は次の通りである。

〔蕃書調所の字書を借りたい〕(断念)

所が其時に九段下に蕃書調所と云ふ幕府の洋学校がある 其処には色々な字書があると云ふことを聞出したから如何かして其字書を借りたいものだ(略)けれども藩士が出抜けに公儀(幕府)の調所に入門したいと云ても許すものでない(略)夫れから藩の留守居の処に行て奥印の事を頼み 私は社^{かみしも}袴を着て蕃書調所に行て入門を願ふた 其時には(略) 箕作阮甫と云ふ人が調所の頭取で早速入門を許して呉れて(略)直に拝借を願ふて英蘭対訳の字書を手に請取て(略)其処で暫く見て 夫れから懐中の風呂敷を出して其字書を包で帰らうとすると ソレはならぬ(略)家に持帰ることは出来ませぬと其係の者が云ふ こりや仕方がない(略)入門してたつた一日行た切りで断念(117 頁 14 行～ 118 頁 11 行)

そこで、横浜へ行く商人に依頼して英蘭対訳辞書をさがす。そしてホルトロップの「英蘭対訳発音付」の辞書を中津藩に買って貰うことに成功する。「自力研究の念を固く」して、英文の書を蘭語に翻訳して英文に慣れることを試みた。

〔ホルトロップの「英蘭対訳発音付」の辞書を藩に買って貰う〕〔英文の書を蘭語に翻訳して英文に慣れる〕

扱如何したら宜からうかと考へた所で 段々横浜に行く商人がある 何か英蘭対訳の字書はないかと頼んで置た所が ホルトロップと云ふ英蘭対訳発音付の辞書一部二冊物がある 誠に小さな字引だけれども 価^{あたひ}五両といふ 夫から私は奥平の藩に歎願して買取て貰て(略)此字引さへあればもう先生は要らないと自力研究の念を固くして唯字引と首引で毎日毎夜独り勉強、又或は英文の書を蘭語に翻訳して見て 英文に慣れる事ばかり心掛けて居ました(118 頁 12 行～ 119 頁 2 行)

松沢弘陽の校注には、ホルトロップの辞書については次のように述べられている。

John Holtrop's English and Dutch Dictionary / Néderduitsch en Engelsch woordenboek,

Second edition, 2 vols, revised enlarged and corrected by A.Stevenson, 1032;1030pp., Dordrecht and Amsterdam, 1823-24. 一七八九—一八一〇年に出版された二巻本の英蘭・蘭英対訳辞書の改訂増補再版（最終版）であり、「誠に小さな字引」ではない大冊である。（118頁）

しかし、諭吉は一人では淋しいので学友に声を掛けて、一緒に勉強しようと誘う。神田孝平、村田蔵六、原田敬策の3人、3人目で賛同者が出る。その様子を次のように語る。

〔学友に英語を遣ろうと相談を掛ける〕

以前の勉強が丸で空になると斯う考へたものだから如何にも決断が六かしい ソコデ学友の神田孝平に面会して如何しても英語を遣らうぢやないかと相談を掛けると（略）大抵方角が付くと僕も屹と遣るから、ダガ今の処では何分自分で遣らうとは思はないと云ふ 夫れから番町の村田蔵六（後に大村益次郎）の処へ行つて其通りに勧めた所が 是れは如何しても遣らぬと云ふ考で（略）僕はそんな物は読まぬ（略）必要な書は皆和蘭人が翻譯するから其翻譯書を読めばソレで沢山ぢやないかと云ふ（略）今度は小石川に居る原田敬策に其話をすると原田は極熱心で 何でも遣らう誰がどう云ふても構はぬ是非遣らうと云ふ（略）（119頁11行～120頁13行）

ここで注目すべきことは、3人とも蕃書調所でオランダ語を教える一級の蘭学者であるということである。諭吉の交際範囲の広さを示している。松沢弘陽の校注には次のようにある。

〔神田孝平〕通称は正式には「たかひら」。天保元年—明治三十一年（1830-98）。美濃出身。江戸に出て漢学を学び、ペリー来航を機に蘭学に転じ、文久二年（1862）蕃書調所教授方出役。慶応四年（1866）開成所頭取。（略）（119頁2行）

〔村田蔵六〕文政七年—明治二年（1824-69）。（略）天保十四年（1843）広瀬淡窓の咸宜園に学び、弘化三年（1846）緒方洪庵の適塾に入門。いったん長崎に遊学したのち嘉永元年（1848）適塾にもどって塾頭となる。（略）安政三年（略）江戸に出、番町に私塾鳩居堂を開き、同年秋には新たに創設された蕃書調所の教授手伝、翌年には講武所教授となった。安政六年（1859）に桂小五郎と会い、また長州藩邸で行われた坪井信道・手塚律蔵・東条英庵らの蘭書会談会に参加した（略）。（180頁17行）

〔原田敬策〕名は吾一、のち一道。天保元年—明治四十三年（1830-1910）。岡山鴨方藩士。洋式兵学を学び、蕃書調所教授手伝。文久三年（1863）渡欧。維新後陸軍少将（略）貴族院議院、男爵（120頁5行）

一緒に英語を学ぶ学友を得て、諭吉は辞書を頼りに英語習得に専心する。そこで苦しんだ

のは発音だった。意味の理解は英語の一字一字にオランダ語を書き写して、苦勞しなかったという。「蘭と云ひ英と云ふも等しく横文にして其文法も（略）相同じければ」と次のように語っている。

〔英学で一番六かしいのは発音〕

原田とは極説ごくが合いふて愈いよいよ英書を読むと云ふ時に（略）其時に英学で一番六かしいと云ふのは発音で 私共は何も其意味を学ぼうと云ふのではない 只スペルリングを学ぶのであるから小供でも宜ければ漂流人でも構はぬ 爾う云ふ者を捜し廻ては学んで居ました（120 頁 14 行～ 121 頁 5 行）

〔英文を蘭文に翻訳する〕〔一字一字、字を引いて蘭文に書き直す〕

始めは先づ英文を蘭文に翻訳することを試み 一字々々字を引てソレを蘭文に書直せばちゃんと蘭文になつて文章の意味を取ることに苦勞はない 唯その英文の語音ごいんを正しくするのに苦しんだが 是れも次第いとうちに緒が開けて来れば夫れほどの難渋でもなし（121 頁 5 行）

〔蘭書読む力は英書に適用して無益でない〕

詰る処は最初私共が蘭学を棄て、英学に移らうとするときに（略）数年勉強の結果を空うして、生涯二度の艱難辛苦と思ひしは大間違の話で 実際を見れば蘭と云ひ英と云ふも等しく横文にして 其文法も略相同じければ 蘭書読む力は自から英書にも適用して決して無益でない（略）水を泳ぐと木に登ると全く別のやうに考へたのは一時の迷であつたと云ふことを發明しました（121 頁 9 行）

ここで言う「一字一字」は今日の「一語一語」に当たる。「發明」は「発見」である。

IV) 諭吉アメリカに渡る

万延元年、諭吉は軍艦奉行木村喜毅の従者として、咸臨丸に乗組み訪米の機会を得た。これは日米修好通商条約の批准書交換のため渡米する、幕府使節新見正興らを護るためであった。

（略）私が江戸に来た翌年即ち安政六年冬 徳川政府から亜米利加に軍艦を遣ると云ふ（略）船の名を咸臨丸と云ふ（略）咸臨丸の出帆は万延元年の正月で品川沖を出て先づ浦賀に行た 同時に日本から亜米利加に使節が立て行くので亜米利加から其の使節の迎船が来た ポーハタンと云ふ其の軍艦か、サンフランシスコに乗て行くのである（122 頁 2 行）（略）所で〔咸臨丸は〕三十七日掛て桑港カ、サンフランシスコに着た、（127 頁 11 行）

サンフランシスコに着いて驚いたのは、「社会上の事」すなわち、社会制度や日常生活であった。

理学上の事に就ては少しも胆を潰すと云ふことはなかつたが 一方の社会上の事に就ては全く方角が付かなかつた (137 頁 5 行)

さて、そこで諭吉が自慢しているのは、ウエブスターの字引を買ってきたことである。

〔ウエブストルの字引を買う〕

其時に私と通弁の中浜万次郎と云ふ人と兩人がウエブストルの字引を一冊づゝ買って来た 是れが日本にウエブストルと云ふ字引の輸入の第一番、それを買てモウ外には何も残ることなく首尾克く出帆して来た、(略) (138 頁 5 行)

〔万延元年〕五月五日の午前に浦賀に着した (141 頁 7 行)

と語っている。そのときの中浜万次郎の立場は通弁官、諭吉は木村撰津守の従者であった。『福翁自伝』には「日本の軍艦もサンフランシスコまで航海 (略) 艦長は時の軍艦奉行木村撰津守 (略) 指揮官は勝麟太郎 (略) 通弁官は中浜万次郎 (略)」(122 頁 12 行) と記されている。

ここで問題となるのは、諭吉と万次郎の 2 人だけがウエブスターの字引を買って帰ったのかということである。この点については、石原千里「万延元年遣米使節一行の将来本について」の指摘がある。石原千里によれば、アメリカのポーハタン号で渡米した正使新見正興らの将来本のうち、購入図書は 690 冊もあり、字引も含まれている。表 1 の通りである。⁵⁾

ここで注目されるのは、「I. 購入図書」の中に「(1) ウォルシストル英語字引 大 10 冊」と「(2) 同 小 5 冊」と記されていることである。また「III. その他」の個人購入本の中にある、名村五八郎の購入本にウエブスター辞書と記されていることである。名村はそのウエブスター辞書を矢野二郎に贈った。⁶⁾

次に注目されるのは、「III. その他」にある勘定組頭森田岡太郎の項に「英華通語 2 冊」とあることである。

更に、「咸臨丸一行将来本」は表 1 の IV の通りである。

咸臨丸一行は、中浜万次郎と福沢諭吉がウエブスター辞書を購入し、諭吉は『華英通語』を購入している。

そして、正使が購入してきた 690 冊は、箱館奉行所分の 244 冊を除く 446 冊が蕃書調所に納入され、それらは蕃書調所と外国奉行所と軍艦操練所 (築地) に再分配された。46 頁の通りである。また、購入図書 15 部 690 冊の納入先の詳細は 46 頁の表 2 の通りである。

表1 将来本概観

I. 購入図書	690 冊	○普請役益頭駿次郎
(1) ウラルシストル英語字引	大 10 冊	合衆国運上所緒荷物税則書 1 冊 (1857 年フ
(2) 同	小 5 冊	イラデルフィア版), 荷物并入高の法則書 1
(3) 英語文法書	100 冊	冊 (サンフランシスコ運上所役人より)
(4) 地理字引	15 冊	○名村五八郎
(5) 地理書	50 冊	亜国曆, 英語文法書など 5 冊以上購入。ウ
(6) 同 小本	25 冊	エプスター辞書も
(7) 同	25 冊	○吉川金次郎 (村垣従者)
(8) 地図	50 冊	世界地図、米国史各 1 冊
(9) 貿易方字引	30 冊	○福村磯吉 (村垣従者)
(10) 窮理書	80 冊	Cornells' Companion Atlas ほか石版画、新
(11) 英仏対訳会話書	100 冊	聞など 8 点
(12) ボウデツ著述航海書	100 冊	○三浦東造 (森田従者)
(13) 航海家暦書 1860 年	50 冊	新聞
(14) 同 1861 年用	25 冊	○加藤素毛
(15) 同 1862 年用	25 冊	地図など 4 点
II. 寄贈図書 (幕府記録にあるもの)	474 冊	○島内栄之助 (川崎道民従者)
1. 米大統領および政事官より大君,		大砲の規則など 5, 6 冊
使節日本外国事務宰相へ	94 冊 (略)	IV. 咸臨丸一行将来本
2. 使節, 日本政府へ	216 冊 (略)	○木村摂津守
3. 個人への寄贈書	154 冊 (略)	ベリー日本行記など
4. 国益のため翻訳することを上申した書	8 冊 (略)	○勝麟太郎
III. その他 (幕府記録以外から知り得る個人が		ロビンソン天文学論、2ヶ年分官府の告牒
購入した書や寄贈を受けた書)		4 冊
○副使村垣淡路守		○中浜万次郎
地理書 1 冊		ウエプスター辞書 2 冊など 9 冊
○小栗豊後守		○牧山修卿
地理書 1 冊		ウイルソン人体解剖学大系
○勘定組頭森田岡太郎		○福沢諭吉
地理書 (測量局頭役より), 全体新論など漢		ウエプスター辞書および華英通語各 1 冊
書 5 冊, 英華通語 2 冊, フランク・レスリ		
ー絵入新聞など購入		

表 2

購入図書	納入先 ①	蕃書調所				箱館奉行所 冊	合計 冊
		冊	外国奉行所 冊	軍艦操練所 冊	冊		
(1) ウラルシストル英語字引 大	\$6.00	8	(2 , 5 , 1)	\$48.00	2	\$12.00	10
(2) 同 小	1.25	3	(1 , 2 , 0)	3.75	2	2.50	5
○ (3) 英語文法書	0.34	70	(40 , 20 , 20)	23.80	30	10.20	100
(4) 地理字引	4.50	10	(2 , 6 , 2)	45.00	5	22.50	15
○ (5) 地理書	0.40	30	(10 , 14 , 6)	12.00	20	8.00	50
○ (6) 同	0.17	15	(7 , 6 , 2)	2.55	10	1.70	25
○ (7) 同	0.34	15	(7 , 6 , 2)	5.10	10	3.40	25
○ (8) 地図	0.80	30	(6 , 14 , 10)	24.00	20	16.00	50
(9) 貿易方字引	5.50	25	(5 , 16 , 4)	137.50	5	27.50	30
○ (10) 窮理書	0.75	50	(25 , 15 , 10)	37.50	30	22.50	80
○ (11) 英仏対訳会話書	0.34	50	(10 , 30 , 10)	17.00	50	17.00	100
(12) ボウデツ著述航海書	3.50	70	(6 , 4 , 60)	245.00	30	105.00	100
(13) 航海家暦書 1860 年	0.35	30	(4 , 3 , 23)	10.50	20	7.00	50
(14) 同 1861 年	0.35	20	(3 , 2 , 15)	7.00	5	1.75	25
(15) 同 1862 年	0.35	20	(3 , 2 , 15)	7.00	5	1.75	25
合計		446	(131 145 170)	625.70	244	258.80	690
箱 (Boxes)		5		3.375	5	3.375	
				\$629.075		\$262.175	
1\$=3 分として			(471両3分と永56文2分5厘)			(196両2分と永131文2分5厘)	

○印は Appleton 社刊のもの () 内の数字は予定数を示す

箱館奉行所分	244 冊	万延元年 11 月 15 日以前
蕃書調所へ	446 冊	文久元年 2 月 25 日納入
同上	131 冊	同 2 月 25 日配分
外国奉行所へ	145 冊	同 3 月 2 日配分
軍艦操練所へ	170 冊	同 3 月 15 日配分

なお、石原千里の調査によれば、ウラルシストル英語字引は原本が現存している。

AE は葵文庫本の請求番号で○印のあるものは将来本そのものと推定される。原書名に続く () 内のアルファベットは、葵文庫本に付された印記の略号で、B= 蕃書調所、G= 外国方、K= 開成所、Nu= 沼津学校。駿府学校、静岡学校印の記載は省略。H は「箱館奉行所旧蔵洋書の研究」における分類番号。

I. 購入図書

(1) ウラルシストル英語字引 大 \$6.00

Worcester, Joseph E.

○ AE-241

Dictionary of the English language. Boston, 1860 (1 cop.) , H-3-(9)

London, 1860 (1 cop.) , 1786. (1854p) 30 × 22 (B) (1861)

葵文庫に Boston 版と London 版が各 1 冊現存する。(略)

(2) ウラルシストル英語字引 小 \$1.25

Worcester, Joseph E.

AE-242

A pronouncing, explanatory, and synonymous dictionary of the English language.

Boston, 1858, 565p. 24 × 15, (B) (G)

葵文庫現存本はかなりほろほろで、良く使用されたことが伺える。⁷⁾

「ウラルシストル英語字引」は Worcester, Joseph E. の編集したもので英語読みすればウースターである。ウースターとウエブスターの辞書は、当時の英語辞書界を二分する代表的辞書であった。福沢諭吉の購入した「ウエブストルと云ふ字引」については、山口一夫著『福沢諭吉の亜米利加体験』に検討がなされており、1828 年刊行されて以来、改訂を繰り返して版を重ねてきたシリーズの縮約版である。⁸⁾

An Explanatory and Pronouncing Dictionary of the English Language. With Synonyms. Abridged from the American Dictionary of Noah Webster, LL.D. By William G. Webster, assisted by Chauncey A. Goodrich, D.D. With numerous useful tables. New York, Mason Brothers, 1859. 490pp.⁹⁾

そして諭吉自身は、ウエブスターの字引を日本に輸入したのは自分が最初だと自慢している。しかし、どうも福沢が日本輸入の一番ではないらしい。岩崎克己によれば、中浜万次郎が嘉永 4 年 (1851) にアメリカから帰国したとき 1845 年版を持参したという。¹⁰⁾

次に、福沢諭吉の購入本で注目すべきものは『華英通語』である。これは森田岡太郎が購入した「華英通語 2 冊」と書名が似ている。しかし、私が国際基督教大学の図書館のレファレンス室で、国内、国外に、その存在を調査してもらった結果、どうも存在しないらしい。これは「華英通語」の誤りであろう。石原千里も同意見である。そうだとすると、この本は森田岡太郎と福沢諭吉の 2 人が日本に輸入したことになる。現在、東北大学図書館狩野文庫に上下合冊本¹¹⁾、香川大学の竹中龍範教授が上巻を所蔵されている。

諭吉はアメリカ渡航中は直接アメリカ人に接し、英語を勉強した。そして帰港してからも英書をできるだけ読むようにした。しかしまだ「英書が六かしくて自由自在に読めない」その状況を次のように語っている。

〔まだ英書が六かしくて自由自在に読めない〕〔便る所は英蘭対訳の字書のみ〕

亜米利加から帰てから塾生も次第に増して相替らず教授して居る中に 私は亜米利加渡航を幸に彼の国人に直接して英語ばかり研究して 帰てからも出来るだけ英書を読むやうにして 生徒の教授にも蘭書は教へないで悉く英書を教へる所がマダなかへ英書

が六かしくて自由自在に読めない、読めないから便る所は英蘭対訳の字書のみ、教授とは云ひながら実は教ふるが如く学ぶが如く共に勉強して居る中に 私は幕府の外国方ぐわいこくがた（今で云へば外務省）に雇はれた（143 頁 3 行～ 9 行）

V) 幕府の外国方御雇となる

万延元年 11 月、福沢諭吉は外国方に雇として採用された。その仕事は、外国の公使・領事から、徳川幕府の閣老又は外国奉行へ差し出された書翰を翻訳するためであった。それは、オランダ語であり、蘭学の実力を認められてのことであった。その次第は次のように語られている。

（略）私は幕府の外国方（今で云へば外務省）に雇はれた 其次第は外国の公使領事から 政府の閣老又は外国奉行へ差出す書翰を翻訳する為めである 当時の日本に英仏等の文を読む者もなければ書く者もないから 諸外国の公使領事より来る公文には必ずオランダ和蘭の翻訳文を添ふるの慣例にてありしが 幕府人に横文字読む者としては一人もなく止むを得ず吾々如き陪臣(大名の家来)の蘭書読む者を雇ふて用を弁じたことである(略) (143 頁 8 行)

このような自分の立場を利用して、諭吉は英文研究を進める。

〔蘭文書翰の翻訳の仕事は、なかなか英文研究のためになる〕

（略）例へば英公使米公使と云ふやうな者から来る書翰の原文が英文で ソレに和蘭の訳文が添ふてある 如何かして此翻訳文を見ずに直接じかに英文を翻訳してやりたいものだと思て試みる、(略) 分らぬと蘭訳文を見る、見ると分ると云ふやうな訳けでなかへ英文研究の為めになりました ソレからもう一つには幕府の外務省には自から書物がある 種々様々な英文の原書がある (略) 借りて自家うちへ持て来ることも出来るから ソレナ事で幕府に雇はれたのは身の為めに大に便利になりました(143 頁 14 行～ 144 頁 5 行)

それでも、諭吉は英語力が、まだまだ十分でないと自覚していた。諭吉は咸臨丸でアメリカから 5 月 5 日浦賀に帰着してからも、英語が難しくて自由自在に読めないので、英蘭辞書を頼りに、「教授とは云ひながら実は教へるが如く学ぶが如く其レヲ〔英語を〕勉強して」いたのである。これは、おそらく『華英通語』の翻訳をさしているのではなからうか。彼の言葉によれば、

〔華英通語を翻訳して出版する〕〔この両三年は英語研究が専業〕

私が亜米利加から帰たのは万延元年 その年に華英通語と云ふものを翻訳して出版し

たことがある 是れが抑も私が出版の始まり 先づ此両三年間と云ふものは人に教ふると云ふよりも自分で以て英語研究が専業であつた (144 頁 7 行)

と記している。翻訳することによって英語研究を専業としたのであろう。『増訂華英通語』の出版が、諭吉の英語研究の成果であった。

『華英通語』は、前半が単語集であり、後半が短文集であったから、徐々に「英語を読み英語を語る」ことができるようになる。

外国方の御雇となった諭吉は、文久元年 12 月に欧羅巴各国への使節派遣に、正式な一員として加わるようになった。この時の行動を次のように語っている。

[文久元年十二月欧羅巴各国に行き英書ばかり買う] [此時は英書を読み英語を語ることが出来る]

(略) 日本から欧羅巴諸国に使節派遣と云ふことがあつて 其時に又私は其使節に附て行かれる機会を得ました (略) 船の出発したのは文久元年十二月の事で (略) 其間の年月は凡そ一箇年 即ち文久二年一杯推詰てから日本に帰て来ました

扱今度の旅行に就いて申せば 私も此時にはモウ英書を読み英語を語ると云ふことが
徐々出来て (略) ^{ロンドン}龍動に逗留中、(略) 唯英書ばかりを買て来た 是れが抑も日本へ輸入の始まりで 英書の自由に使はれるやうになつたと云ふのも是れからの事である (144 頁 10 行～ 146 頁 14 行)

こうして、英書を読み、英語を話せるようになって、英書を大量に買って帰国した。そして、ヨーロッパ巡回中は、「外国人に一番分り易い事で、殆んど字引にも載せない」と云ふやうな事が此方では一番六かしい」ということを実感し、調査して帰て来た。これらをまとめたものが『西洋事情』(慶応 2 年～明治 3 年刊) となったという。

[ヨーロッパ巡回中の胸算]

(略) 私の欧羅巴巡回中の胸算は (略) 外国の人に一番分り易い事で殆んど字引にも載せない」と云ふやうな事が此方では一番六かしい、だから原書を調べてソレで分らないと云ふ事だけを此逗留中に調べて置きたいものだと思て 其方向で以て是れは相当の人だと思へば其人に就て調べると云ふことに力を尽して (略) ソレを台にして尚ほ色々な原書を調べ又記憶する所を綴合せて西洋事情と云ふものが出来ました (154 頁 2 行)

『西洋事情』を刊行し終るまでの間に、諭吉の英語研究は進み、身分も大きく変化する。

VI) 幕府に召し出されて直参となる

論吉の身分が変わったのは元治元年（1864）10月6日の事である。旗本となり、殿様と呼ばれ、江戸城に自由に入出りできる身分となったのである。その風景は次の通り。

〔論吉 旗本になり、殿様と呼ばれる〕

（略）扱江戸に来て居る中に幕府に雇はれて 後にはいよへ幕府の家来になつて仕舞へと云ふので高百五十俵正味百俵ばかりの米を貰て 一寸旗本のやうな者になつて居たことがある（略）江戸で御家人の事を旦那と云ひ旗本の事を殿様と云ふのが一般の慣例である 所が私が旗本になつたけれども固より自分で殿様なんて馬鹿氣たことを考へる訳けもなければ家内の者も其通りで 平生と少しも變た事はない 爾うすると或日知己の幕人（たしか福地源一郎であつたかと覚ゆ）が玄関に来て 「殿様はお内か 「イーエ そんな者は居ません 「お内においでなさらぬか 殿様は御不在か 「そんな人は居ません」と取次の下女と頻りに問答して居る様子、狭い家だからスグ私が聞付けて玄関に出て其客を座敷に通したことがあるが 成るほど殿様と云て下女に分る訳はない 私の家の中で云ふ者もなければ聞いた者もない言葉だから（210頁2行～15行）

こうして陪臣の身分から直参の旗本となり、論吉の前途は大きく開けていたが、社会は大きな変化が始まっていた。慶応3年、三度目の外国行き、亜米利加に行った。そして帰国してからは「幕府の外務省に出て翻訳をして居た」（198頁10行）。12月には、鉄砲洲から新銭座へ移り、慶応4年、すなわち明治元年の正月には伏見の戦争が始まり、將軍慶喜公が江戸へ逃げ帰り、明治維新となる。

〔慶応三年十二月 鉄砲洲から新銭座へ引移る〕〔王政維新の始まり〕

（略）とうへ慶応三年の暮になつて世の中が物騒になつて来た（略）学生は次第々々に少くなると同時に 今まで私の住で居た鉄砲洲の奥平の邸は外国人の居留地になるので幕府から上地を命ぜられ 既に居留地になれば私も其処に居られなくなる ソコで慶応三年十二月の押詰めに 新銭座の有馬と云ふ大名の中屋敷を買受けて引移るや否や鉄砲洲は居留地になり、明くれば慶応四年即ち明治元年の正月早々伏見の戦争が始まつて將軍慶喜公は江戸へ逃げて帰り サアそこで又大騒ぎになつて仕舞た 即ち是れが王政維新の始まり、（200頁14行～201頁7行）

VII) 慶應義塾の英語教育

自分の英語力が付くと、論吉は英語教育に力を入れ工夫する。慶応3年のアメリカ行のときは、あらんかぎりの原書を買ってきて、生徒の各々に版本を持たせて授業をするようになった。その特色は以下の通りである。

〔有らん限りの原書を買って来る〕〔塾の生徒に版本（原書）を持たせて修業〕

（略）今度私が亜米利加に行た時には（略）今度こそは有らん限りの原書を買て来ました 大中小の辞書、地理書、歴史等は勿論 其外法律書、経済書、数学書なども其時始めて日本に輸入して 塾の何十人と云ふ生徒に銘々其版本を持たして立派に修業の出来るやうにしたのは実に無上の便利でした（226 頁 7 行～ 12 行）

〔アメリカ出版の学校読本が日本中に行はれる〕

ソコで其当分十年余も亜米利加出版の学校読本が日本国中に行はれて居たのも 畢竟私が始めて持て帰たのが因縁になつたことです、其次第は生徒が始めて塾で学ぶ、其学んで卒業した者が方々に出て教師になる、教師になれば自分が今まで学んだものを其学校に用るのも自然の順序であるから 日本国中に慶応義塾に用ひた原書が流布して広く行はれた（略）（226 頁 12 行～ 227 頁 1 行）

諭吉は塾を鉄砲洲から新銭座へ移し、塾の名を慶応義塾と命名し、塾の経営方針を新しくする。毎月、授業料を取り、先進生が生徒に教える。

〔慶応四年 塾の名を年号に取て慶応義塾と名づける〕〔授業料と云ふ名を作て毎月取立てる〕

扱鉄砲洲の塾を芝の新銭座に移したのは明治元年即ち慶応四年、明治改元の前でありしゆゑ 塾の名を時の年号に取て慶応義塾と名づけ（略）塾則のやうなものを書いて、是れも写本は手間が取れると云ふので版本にして一冊づゝ生徒に渡し ソレには色々箇条のある中に 生徒から毎月金を取ると云ふことも慶応義塾が創めた新案である（略）授業料と云ふ名を作て生徒一人から毎月金二分づゝ取立て 其の生徒には塾中の先進生が教へることにしました 其時塾に眠食する先進長者は月に金四両あれば喰ふことが出来たので ソコで毎月生徒の持て来た授業料を掻き集めて教師の頭あたまに四両づゝ行渡れば死しにはせぬと大本たいほんを定めて 其上に尚ほ余りがあれば塾舎の入用にすることにして居ました（236 頁 7 行～ 237 頁 7 行）

そして、英書で講釈を行い、どのような社会環境の中でも「世間に頓着するな」と休業はしなかったという。その状況を以下のように語っている。

〔上野で戦争の日も、諭吉は英書で経済の講釈〕

明治元年の五月上野に大戦争が始まつて其前後は 江戸市中の芝居も寄席も見世物も料理茶屋も皆休んで仕舞て八百八町は真の闇 何が何やら分らない程の混乱なれども 私は其の戦争の日も塾の課業は罷めない、上野ではどん／＼鉄砲を打て居る、（略）丁度

あの時私は英書で^{エコノミー}経済の講釈をして居ました、(略)上野の騒動が済むと奥州の戦争と
為り 其最中にも生徒は続々入学して来て塾はます―盛になりました (略)其時に
私が塾の者に語たことがある、(略)慶応義塾は一日も休業したことはない 此塾のあ
らん限り大日本は世界の文明国である 世間に頓着するなど申して大勢の少年を励まし
たことがあります (238 頁 2 行～239 頁 9 行)

[新政府は明治五六年までは教育に手を着けることができない] [洋学を教えるのは慶応
義塾ばかり]

維新の騒乱も程なく治まつて天下太平に向て来たが 新政府はマダマダ跡の片付が容
易な事ではなくして 明治五六年までは教育に手を着けることが出来ないで 専ら洋学を
教へるは矢張り慶応義塾ばかりであつた 何でも廃藩置県の後に至るまでは慶応義塾ば
かりが洋学を専らにして ソレから文部省と云ふものが出来て政府も大層教育に力を用
ふることになって来た (241 頁 10 行～14 行)

[慶応義塾は一切英学と定め英書を読み英語を解するように教導]

義塾は (略) 生徒の数も段々殖えて塾生の数は常に二百から三百ばかり 教ふる所の事
は一切英学と定め 英書を読み英語を解するやうにとばかり教導して (略) 漢書を読ま
ずに英語ばかりを勉強するから英書は何でも読めるが日本の手紙が読めないと云ふやう
な少年が出来て来た、(241 頁 15 行～242 頁 4 行)

明治 3 年、『西洋事情』を刊行し終えて、明治 4 年の春、慶応義塾が新銭座から三田に移る。
この移転が慶應義塾の面目を新たにし、今日へと発展するのである。

VIII) 諭吉が使用した英語関係の文献

諭吉が万延元年咸臨丸でアメリカに渡ったときは、英語力はまだまだで、英書を自由自在
に読み、英語を話せるようになったのは、『増訂華英通語』の翻訳を出版してからと推定で
きる。外国方の御雇となり、文久元年 12 月ヨーロッパ各国への使節派遣に加わったときには、
「英書を読み英語を語ると云ふことが^{そろそろ}徐々出来」る状況にあった。また、元治元年 10 月 6 日
には直参となって、慶応 3 年には三度目の外国行でアメリカへ渡っている。帰国してからも
「幕府の外務省に出て翻訳をして居た」。

以上、諭吉が岡見彦三に呼ばれて江戸へ出てから、幕府に雇われて自由に洋書を借用でき
るようになるまでの間に利用し、参考にしたと思われる文献を発見し考証してきた。英語の
語学書と辞書を整理すると、次のようになる。¹²⁾

1. キニツフルの店で薄い蘭英会話書 未詳
2. 英蘭対訳の辞書 (審書調所) [借用不可]

3. ホルトロップと云ふ英蘭対訳発音付の辞書
John Holtrop's English and Dutch Dictionary / *Néderduitsch en Engelsch*, woordenboek, Second edition, 2 vols, revised enlarged and corrected by A. Stevenson, 1032:1030pp., Dordrecht and Amsterdam, 1823-24.
4. ウェブストルの字引
An Explanatory and Pronouncing Dictionary of the English Language. With Synonyms. Abridged from the American Dictionary of Noah Webster, LL.D. By William G. Webster. assisted by Chaune A. Goodrich, D. D. With numerous useful tables. New York, Mason Brothers, 1859.490pp.
5. 華英通語
6. ウラルシストル英語字引 大 [蕃書調所 外国奉行所 軍艦操練所 箱館奉行所]
Worcester, Joseph E. : *A Dictionary of the English Language*, Boston, Hickling, Swan, and Brewer, 1860 1786p.
7. ウラルシストル英語字引 小 [蕃書調所 外国奉行所 箱館奉行所]
Worcester, Joseph E. : *A Pronouncing, Explanatory, and Synonymous Dictionary of the English Language*, Boston, Hicking, Swan, and Brewer, 1858, 565p.
8. 英語文法書 [蕃書調所 外国奉行所 箱館奉行所]
Corvell, L.T.: *A Digest of English Grammar, Synthetical and Analytical*, New York, D. Appleton & Co., 1860, 218p.
9. 地理字引 [蕃書調所 外国奉行所 軍艦操練所 箱館奉行所]
Thomas, J. and Baldwin, T. (ed.): *A Complete Pronouncing Gazetteer, or, Geographical Dictionary of the World*, Philadelphia, J. B. Lippincott, 1860, 2182p.
10. 貿易方字引 [蕃書調所 外国奉行所 軍艦操練所 箱館奉行所]
Homans, J. Smith & Homans, J. Smith, Jr.: *A Cyclopaedia of Commerce and Commercial Navigation*, Second ed. New York, Harper & Brothers, 1859, 2009p.
11. 英仏対訳会話書 [蕃書調所 外国奉行所 軍艦操練所 箱館奉行所]
Chouquet, Gustave : *Conversations and Dialogues upon Daily Occupations and Ordinary Topics in French Conversations*, New York, D. Appleton & Co., 1860, 196p.

1～3が英語学習期の中心で、4～11が渡米してからである。

蘭学者諭吉が頼りにしたものが、3のホルトロップの英蘭・蘭英辞書であった事は明らかである。そして5の『華英通語』の翻訳を通じて英単語を記憶し、英文の日常会話を習得したといえよう。文法は、オランダ語と英語とがともに横文であって、文の意味の理解に苦労しなかったという発言に、オランダ語習得の苦労が無駄にならなかったことを知ることができる。

日本人の編集した英語のテキスト、英和辞書のない時代に、蘭学者福澤諭吉の英語学習法は、きわめて特色のあるものであった。

(1) 英学で一番六かしいのは発音であった。

(2) 英文を蘭文に翻訳することを試みた。そのため、一語一語を辞書で引いて、蘭文に書き直した。

(3) 蘭と云ひ英と云ふも等しく横文にして其文法もほぼ同じなので、蘭書を読む力は英書にも適用して決して無益ではなかった。

こうした苦勞の末に習得した英語力によって、諭吉はアメリカ、ヨーロッパ諸国を見聞して体験したことをまとめる。

(4) 渡米して驚いたのは、理学上のこと（科学的事項）ではなく、社会上のこと（生活習慣・社会制度）であった。それをまとめたのが『西洋事情』であった。

以上のように、諭吉は『増訂華英通語』の翻訳出版によって、英書が読め、英語を話せるようになり、英学を導入し、英語教育へと力を入れる。英語研究の成果『増訂華英通語』については、別稿とする。外国方でイギリス外交官の英文をオランダ語訳を参考にして日本文に翻訳した実態も、今後の興味深いテーマである。

註

- 1) 高野彰「幕末の洋書印刷物—活字による見分け方—」『東海地区大学図書館協議会誌』第32号、1987年、17-18頁。2.C. 岡見彦三版の項。
- 2) 『大日本古文書 幕末外国関係文書之十二』東京帝国大学編纂兼発行、大正9（1920）年、472頁。「一七五 九月八日調印日本國大不列顛國和親約定副章 長崎に於て 調印」より引用した。
- 3) 『大日本古文書 幕末外国関係文書之二十二』東京帝国大学編纂兼発行、昭和14（1939）年、361頁。「一二〇 三月六日老中達書 外國奉行下田奉行并箱館奉行へ 通辯稽古の件」より引用した。
- 4) 長尾正憲『福沢諭吉の研究』、思文閣出版、1988年、77頁。
- 5) 石原千里「万延元年遣米使節一行の将来本について 付『福翁自伝』の英学史関係記述再考」日本英学史学会編『英学史研究』第14号、1981年、185-215頁。
日米修好通商百年記念行事運営会編『万延元年遣米使節史料集成』全7巻、昭和30（1955）年、風間書房。
- 6) 石原千里「万延元年遣米使節一行の将来本について」203頁。
- 7) 同上、190頁。
- 8) 山口一夫『福澤諭吉の垂米利加体験』福澤諭吉協会、1986年、141-150頁。
- 9) 同上、141-150頁。なお、丸山信「ウエプスターの辞書考」（『福澤手帳』第47号、1985年）によれば、ウエプスターの縮約版には、C. A. グッドリッチの単独編纂になる610ページのものがあり、福澤諭吉の購入したのは、こちらだという。また、石原千里の教示によれば、島田三郎『矢野二郎伝』（矢野二郎翁伝記編纂会、1913年）に、咸臨丸乗込一行の通訳名村五八が「ウエプスターの袖珍辞書を二郎に贈りしが」（27頁）とある。最近では、2007年刊の早川勇『ウエプスター辞書と明治の知識人』（春風社）に「四・四 福沢諭吉と中浜万次郎のウエプスター将来本」

- という節があり、「福沢と中浜が一冊ずつ買ったウェブスター辞書は、一八五九年出版の A Pronouncing and Defining Dictionary of the English Language ではないかと思われる」(205 頁) という。
- 10) 岩崎克己「徳川時代に於ける英語辞書の舶載」『書物展望』117号、1941年3月、2-13頁。11頁の「丙 英英辞書」の項に「嘉永四年中濱萬次郎の齎した英書の一つに「ディクシヨネリ千八百四十五年板 一冊」といふのがあったが、その内容は矢張り明かでない」(11頁上段7行)とある。
岩崎克己「黎明期における英文和訳」『英文学研究』18-2、1938年、247頁。
 - 11) 飛田良文・宮田和子「十九世紀の英華・華英辞典目録」『国語論究6 近代語の研究』明治書院、1997年、569頁。
 - 12) 6～11の原書名は石原千里「静岡学問所と名村五八郎元度」『東日本英学史研究』第13号、2014年、76-88頁による。

〔謝辞〕 本稿の執筆にあたって、万延元年遣米使節の将来本について石原千里日本英学史学会会員の御教示をいただいた。厚く御礼を申し上げます。